

縄文人と弥生人の動物観

西本豊弘

はじめに

1. 狩猟獣と家畜
2. 動物儀礼
3. 動物型製品

4. 動物絵画

5. イヌと人間との関係

6. イノシシ・ブタと人間との関係

おわりに

論文要旨

縄文時代は狩猟・漁撈・採集活動を生業とし、弥生時代は狩猟・漁撈・採集活動も行いが、稲作農耕が生業活動のかなり大きな割合を占めていた。その生業活動の違いを反映して、それぞれの時代の人々の動物に対する価値観も異なっていたはずである。その違いについて、動物骨の研究を通して考えた。

まず第1に、縄文時代の家畜はイヌだけであり、そのイヌは狩猟用であった。弥生時代では、イヌの他にブタとニワトリを飼育していた。イヌは、狩猟用だけではなく、食用にされた。そのため、縄文時代のイヌは埋葬されたが、弥生時代のイヌは埋葬されなかった。

第2に、動物儀礼に関しては、縄文時代では動物を儀礼的に取り扱った例が少ないことである。それに対して弥生時代は、農耕儀礼の一部にブタを用いており、ブタを食べるだけではなく、犠牲獣として利用したことである。ブタは、すべて儀礼的に取り扱われたわけではないが、下顎骨の枝部に穴を開けられたものが多く出土しており、その穴に木の棒が通された状態で出土した例もある。縄文時代のイノシシでは、下顎骨に穴を開けられたものは全くなく、この骨の取り扱い方法は弥生時代に新たに始まったものである。

第3に、縄文時代では、イノシシの土偶が数十例出土しているのに対して、シカの土偶はない。シカとイノシシは、縄文時代の主要な狩猟獣であり、ほぼ同程度に捕獲されている。それにも関わらず、土偶の出土状況には大きな差異が見られる。弥生時代になると、土偶そのものもなくなるためかもしれないが、イノシシ土偶はなくなる。土器や銅鐸に描かれる図では、シカが多くなりイノシシは少ない。このように、造形品や図柄に関しても、縄文時代と弥生時代はかなり異なっている。

以上、3つの点で縄文時代と弥生時代の動物に対する扱い方の違いを見てきた。これらの違いを見ると、縄文時代と弥生時代は動物観だけではなく、考え方全体の価値観が違うのではないかと推測される。これは、狩猟・漁撈・採集から農耕へという変化だけではなく、社会全体の大きな変化を示していると言える。弥生時代は、縄文時代とは全く異なった価値観をもった農耕民が、朝鮮半島から多量に渡来した結果成立した社会であったと言える。